



広島修道大学

Hiroshima Shudo University

Faculty Development

NEWS LETTER

Staff Development

2024
No. 18

2024年度のFD・SD研修会を振り返って

学長 矢野 泉

FD・SD研修会は、本学の課題やおかれている環境、将来の目標、各学部・研究科や部局の取り組み等、教職員がともに情報を共有し、考えていく重要な機会と位置づけられている。

本年度の第1回FD・SD研修会（修道力フォーラム）は、「私立大学をとりまく環境－これからの教育について－」をテーマとし、講師に2022年度まで関西学院大学学長、日本私立大学連盟副会長を務められ、現在も文部科学省中央教育審議会委員等として、大学運営と高等教育政策に幅広い見識と経験をお持ちの村田治関西学院大学名誉教授をお迎えした。村田先生の講演は、①私立大学を取り巻く環境、②大学教育の課題、③これからの大学教育と大学経営、から構成され、①では全国的な私立大学の定員未充足と、一方で4年制大学の進学率が50%以上という「ユニバーサル段階」の高等教育において、大学として知識、技能の教授だけではなく、正課外教育も含めた「新しい広い経験の提供」が重要となっていることが示された。②では、教育と労働生産性の国際比較分析等から、中等教育段階での理数教育の重要性や、理系の技術・知識と同じに経済も分かる人材の重要性等が指摘された。③では、関西学院大学でPBL型授業を全学教育で導入した例や「Kwansei コンピテンシー」等をご紹介いただいた。コンピテンシーレベル教育についての関西学院大学の実践例等、これからの時代に必要な大学教育の多様な取り組みについて学ぶことができた。

第2回FD・SD研修会では、「果たしてAIは大学にとって有益なのか？」をテーマに、ChatGPT等の急速な社会的広がりの中で、学習上の悪影響への懸念と有効な新技術と

しての利用の両面において、大学教育の現場へも多くの課題が投げかけられているAIをとりあげた。本学は2023年5月に「ChatGPT等生成AIについて」とする学長メッセージを打ち出したものの、それ以後大学全体として十分な議論が行われていなかった。企業等では事務面において有効な利用も広がっていることから、今回のFD・SD研修会を本学におけるAI利用についての全学的な議論の端緒と位置づけ、教育、運営の両面からAIの具体的な有効性について考えるきっかけとなることを期待した。本学の情報体制整備担当副学長である大澤真也教授、知能情報学が専門の経済科学部経済情報学科の坂口琢哉准教授、IR室長を兼務する市室順子学長室長にご登壇いただき、社会におけるAIの水準や、実際に業務上、教育上で活用、試用されている実践例についてお話いただいた。いずれもわかりやすく具体的な情報を提供いただき、研修会後は登壇者や情報センターへ活用についての問い合わせがある等、教職員への新しい刺激となったのではないかと考える。また、この研修会では、今回のテーマ及びこれまでのFD・SD研修会後のアンケートの声をふまえ、オンラインで開催すると同時にリアルタイムQ&AツールであるLiveQを使用した質疑応答の実施を試みた。研修会を担当する人事課にとって、これも1つのチャレンジの機会となった。

ご多忙の中ご登壇いただいた皆様、また事後アンケートにおいて感想に加え様々なご提案をいただいた本学構成員の皆様へ感謝をお伝えしたい。今後も、教職員の幅広い声を取り入れながら、本学の教育をより良いものにしていくための相互研鑽の場として、FD・SD研修会を位置づけていきたい。

Contents

2024年度のFD・SD研修会を振り返って	1
2024年度第2回FD・SD研修会	2
大学教育学会第46回大会参加報告	3

大学教育学会2024年度課題研究会参加報告	3
私大連「FD推進ワークショップ」参加報告	3
教育力アップセミナー参加報告	4

2024年度 第2回 FD・SD 研修会

テーマ「果たして AI は大学にとって有益なのか」

果たして AI は大学にとって有益なのか

副学長 大澤 真也

AIを恐れ禁止することは現実的ではありません。学生は禁止をしても隠れて使うでしょうから、AIを使っている前提で、教える側が意識を変える必要があると考えています。何よりも大事なのは学生が「まず自分で考えること」です。たとえば私の授業で単純な英文和訳を課すと学生はほぼ完璧な訳を作成します。自分で辞書を調べて考えた上でAIを活用するのであれば良いのですが、多くの学生はそのまま機械に訳させて楽をしようとします。そのような場合、私は単語の意味や文構造などを教室内で確認するようにしています。自分で考えるというプロセスを経ない学生は私の問いに答えられません。ま

たここ数年は教室内で数多くの小テストを実施するようにしています。教室外ではAIを利用できたとしても、教室内では自分で考えて答えを導き出さないといけないからです。自分の知識として身に付ける必要が無いものに関してAIは今後私たちの生活にあらゆる形でかかわる必須のものになるでしょう。一方で必要なものについては「まず自分で考えること」は重要であり続けます。学習の本質は変わらないのです。話は変わり最近『ザ・クリエイター／創始者』（2023）という映画を観ました。渡辺謙さんが出演していますが、AIをテーマにした他の映画とは少し異なり興味深いです。

新たな AI 時代を生きる－まずは触って知る所から－

経済科学部 坂口 琢哉

2022年11月末に「ChatGPT」が公開されて以来、AI利用は新たな局面を迎えた。同サービスは「生成AI」と呼ばれるAIの一種であり、人間の様々な質問に対し、自然な応答文を生成することが出来る。その汎用性はまさに驚異的で、単なる雑談相手から専門的なアドバイスまで、ありとあらゆる問い合わせに対応可能である。あまりに汎用的すぎるため、逆に何に利用して良いか迷われている方も多いのではなかろうか。

こうした背景を受け、今年度のFD・SD研修会では、特に大学業務におけるAI利用をテーマに講演が行われた。その中で、私自身も実践している3つの利用事例を紹介させていただいた。ただし限られた時間の中、表面的な

入出力例の紹介に留まり実際の使用感などにはあまり触れられず、またやや専門的な内容になってしまった。発表内容について、事前にChatGPTと相談しておけば良かったかも知れない。

現在、ChatGPTはwebで簡単にアクセスでき、また最近は個人登録も不要となって誰でもすぐに試せるようになった。この度の研修会を期に、まずはプライベートでも良いので触っていただき、現在のAIに何が出来るか、そして何が出来ないかを感じていただきたい。その上で、AIというツールをどの様に活用して未来をどの様に描くのか、一緒になって考えていただければ幸いである。

果たして AI は大学にとって有益なのか？－総合企画課での事例－ 学長室総合企画課 市室 順子

本学の第4期中期事業計画において、業務の効率化は重要な課題として位置づけられています。今回の発表では、この課題解決の一端として、AIがどのように貢献できるのか、総合企画課内での具体的な事例と、生成AIを用いて、EXCELで作成した一覧表から個別メールを配信するRPAの作成、報告書の素案作成などの試行結果を報告しました。

試行を進める中では、一つ完成すると、こんなこともできるのではないかといろいろと試してみたくなり、生成AIが単なる業務効率化だけでなく、創造性を刺激し、新たな価値を生み出す可能性を秘めているのではと感じ

ています。しかしながら、出力される情報の正確性には注意が必要であり、プライバシー保護や情報セキュリティ対策も欠かせません。

AIはあくまでツールであり、人材育成や組織全体の変革なしには、その能力を最大限に引き出すことはできません。まずは、事務作業の自動化やペーパーレス化など、具体的な施策を通じて、教職員の負担を軽減し、より重要な業務に集中できる環境の整備、学生に対するサービス向上の一環として、AIを活用した自動応答システムの導入などを目指せる組織内の気運醸成に尽力していこうと思います。

各種研修会参加報告

大学教育学会第46回大会参加報告

副学長 羅 星 仁

2024年6月に関西国際大学神戸山手キャンパスにて開催された大学教育学会第46回大会に参加した。今回の大会の統一テーマは「大学教育は持続可能か?—ポストコロナ、急激な少子化、AIの脅威に日本の大学教育はどう立ち向かうのか—」であり、これからの大学教育の課題と可能性を考える大会であった。基調講演では、『韓国大学教育からみた日本へのインプリケーション』と題した講演が行われ、大会校企画シンポジウム「大学教育は持続可能か?」では、急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育政策や地域社会と共存する大学として現在の取組およびこれからの高等教育の在り方などについての報告があった。

ラウンドテーブルでは、「学習成果の可視化とその応用：学修支援または教育的介入のための手段として」と「汎用的／分野横断的な能力は育成可能か—学士課程カリキュラムの比較を通して」に参加し意見交換を行った。いずれの発表も大学おける教学マネジメントに関連する内容であり、検討に値する内容であった。ほかにも、FDや一般教養教育など多様なテーマについての報告があり、他大学の取り組み等に関して非常に有益な情報を得ることができた。ここで得た知見を今後本大学の教育力向上のための取り組みに活かしたい。

大学教育学会2024年度課題研究集会参加報告

人文学部 阪 上 辰 也

2024年11月16日から17日にかけて新潟大学五十嵐キャンパスにて開催された大学教育学会の課題研究集会に参加し、学問の壁を越えた学びを支える教学マネジメントの在り方についての情報収集を行いました。

基調講演では、吉見俊哉氏により、一般的に使われる文理融合ではなく「文理複眼」という新たな視点が提唱され、社会の価値観や仕組みの長期的な変化を捉える教育の必要性和複数の専門性を持つ人材を大学で育成する必要性が説明されました。また、複数のシンポジウムが開かれ、SDGsや生成AIなどをテーマにしたシンポジウムに加えて、新潟大学が取り組む「全学分野横断創生プログラム」に焦点が当てられ、参加者の関心を集めていました。このプログラムでは、学生が自らの探究課題に基づいて多様な分野横断型の学習を選択できる仕組みが特徴的なのですが、部局間連携や教育の質保証における課題が残されており、諸課題に対処する上での教学マネジメントの重要性が指摘されていました。

本研究集会で得られた知見を活用し、本学における教育システム・教学マネジメントの在り方を振り返る上で良い機会となりました。今後は、生成AI活用や分野横断的な学びの実現に向けた取り組みについて検討し、学生の主体性と創造性を育む教育環境の構築を目指したいと思います。

私大連「FD推進ワークショップ」参加報告

商学部 世 良 和 美

2024年8月5日、新任教員等を対象とした日本私立大学連盟主催のワークショップに、オンラインで参加させていただいた。教職に就いて1年半、未だ模索を続けている自身にとって、同じ目線で語り合える仲間との心に残る場となった。私の所属したDグループは5名。大学の所在地は東北・関東・九州と幅広く、分野も医療・IT・法学・社会学・経営学と異なるものの、活発な意見が交わされ、とても楽しい1日であった。

メンバーによる模擬授業で、個性あふれる多彩な事例から大いに学びを得たことはもちろんであるが、未熟な自身には、まず各先生の佇まいや物の見方、考え方等が、とても良い刺激となった。たとえば、「どうすれば学生が主体的に授業に臨んでくれるか?」とグループ内で議論した際、「受講生が積極的になれるための前提として、心理的安全性の担保を」「教員がバカになる!」といった意見がメンバーから出された。「授業内容を面白くせねば」とばかり考えていた私には思いつけない柔軟な発想をされるお姿や、少し視野を広げ俯瞰した物の見方・考え方に、はっとさせられた。

受講後に生じた意識の変化の一つは、「自身の客観視を」である。学生にはどう映っているのか、一面的な物の見方になっていないか…。ワークショップで一緒に先生方の佇まいを鮮やかに思い起こしつつ、時折自身を振り返っている。

教育力アップセミナー参加報告

法学部 森 啓 悟

本セミナーは、組織的な教育力を高めることを目的としており、具体的には、少子化などの影響で定員割れや閉校となる大学が存在する中、今後、本学が志願者を増やすには何をすべきか検討した。

グループのメンバーごとに異なる資料が配布されたが、私が検討したデータは18歳の人口予測と大学・短大・専門学校進学率、地元残留率であった。データからは、短大と専門学校への進学率は低下する一方、大学への進学率は上昇していることや、中国地方の中では広島県の女性は地元に残留する割合が比較的高いことが読み取れた。そこで、地元に残留する女性にとって、魅力的になるような大学を目指していくことを提案し、そのために、何をすべきなのか考えた。グループの他のメンバーが提示したデータや提案も踏まえながらディスカッションをすることで、より優れた提案をすることができたと思われる。

また、他学部の先生や職員の方といった、普段あまり関わりがない方と交流をするよい機会となった。他の先生の授業内容や学生への対応の仕方、職員の方の職務内容などを知ることができ、勉強になった。今後、このような交流が増えると望ましいと感じた。

教育力アップセミナー参加報告

総合企画課 永 妻 紗 彩

本セミナーは、主に在職2年以内の教職員を対象とし、大学が置かれた状況や本学の特徴を理解し、組織的な教育力を高めることを目的としている。第14回目となる今年度は、大学を取り巻く社会状況および本学の現状に関するデータをもとに、本学の教育や入試における課題と改善策について、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたグループワークで意見交換を行った。

はじめに、松川学習支援センター長よりアクティブ・ラーニングとIRについて説明がなされた。大学運営におけるIRでは、大学の経営・教育・意思決定などにおいて、収集・分析したデータを活用することが求められていると理解できた。

グループワークでは「いかに入学定員充足を維持するか」をテーマに、予め用意されたデータをトピックスごとに分析した後、各トピックスの分析結果を持ち寄り、検証した結果をグループごとに発表した。限られた時間内で分析の重点をどこに置くべきか迷い、十分な分析ができないまま検証作業に入ったため苦戦した。しかし同時に、検証に向けた議論において精度の高い分析データが不可欠であることを、身をもって学ぶことができた。

本セミナーで得た知見を生かし、日々の業務にIRの視点を取り入れ従事していきたい。

教育力アップセミナー参加報告

キャリア支援課 藤 井 喬 浩

本学の教育力アップセミナーは、大学が置かれた状況や本学の特長の理解を促し、あわせて組織的な教育力を高めることをねらいとして、着任早々の教職員を対象として2010年度より実施されている。

今回参加した第14回教育力アップセミナーは、「組織的な教育力を高めるために」というテーマで、教職員で議論を交わし、本学の現状と課題、そして改善策などについて考える貴重な機会となった。まず、冒頭に本セミナーの目的やアクティブ・ラーニングの意義に関して紹介いただき、そして各部局で保有する各種データとIRに関して本学の現状をふまえてご教授いただいた。後半は各グループに分かれ、各種データにもとづいて本学の課題や改善策に関する検討を行った。部局を超えて教職員がそれぞれの立場で意見を出し合い、より本学の魅力を高めるために今後どのような施策が必要か、グループごとに意見をまとめ発表し、「学生がより快適に過ごせるキャンパスづくりや在学生の満足度が、結果として大学の魅力となり、志願者増加にも繋がるのではないか」などという意見が出た。

セミナー終了後には懇親会が開催され、普段顔を合わせる機会が少ない教職員同士の親睦を深めることができた。



広島修道大学
Faculty Development
NEWS LETTER
Staff Development

発行日 2025年3月13日
発行者 広島修道大学
〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1
TEL. (082) 830-1105
ホームページ <http://www.shudo-u.ac.jp>
E-mail jinji@js.shudo-u.ac.jp